

花粉症の新しい漢方治療

花粉症の漢方治療といえば、これまで主に小青竜湯が使われてきました。効果はあるのですが、中には効かない人もいました。どうしてなのか。この研究を進め、その理由を東洋医学の立場から解明し、小青竜湯など従来より花粉症に使われていたもの以外の漢方薬も活用して治療効果を上げているのが、日本医科大学東洋医学科助教の三浦於菟先生です。

小青竜湯が効く人と効かない人がいる理由

花粉症といえは、一般に小青竜湯といわれますが、麻黄附子細辛湯も使われることも、効果がありません。どうしてでしょう。それに漢方薬は本来、患者の症状に応じて薬を選ぶのに、花粉症に関しては、この病気にはこの薬といったような西洋医学的なワンパターンの処方なされていきます。これもおかしい。こう三浦先生は疑問をもち、研究を進めました。花粉症の患者に何種類かの漢方薬を処方し、効果を調べたのです。

「その結果、188例のうち165例で効きました。小青竜湯を含め、いろいろな漢方薬を使うことで約88%の効果が得られたのです。このデータをもとに、効いた薬の特徴によって患者さんを分類してみました」(三浦先生)

はなく、広い意味でのカゼととらえます(鼻水などカゼの初期と似た症状が出るからです)。そのカゼには体が冷える寒証のカゼと体が熱くなる熱証のカゼがあり、前者には体を温める薬が、後者には冷やす薬が効きます。小青竜湯は前者に入ります。三浦先生の研究では、温める薬が効いた割合は27・1%、冷やす薬が効いた割合は26・1%、両者を混合した薬が効いた割合は28・7%、そのほかが5・9%、無効が12・2%でした。

温める薬が効いたケースを「辛温群」と、冷やす薬が効いたケースを「辛涼群」と、混合のケースを「混合群」とし、各群の患者の特徴を調べてみるとさまざまなことが分かってきました。

「まず症状が出る初発日を見ると、辛温群がいちばん早く、1月中旬からで、2月の中旬下旬がピークで、平均の発病月日は2月12日でした。辛涼群は2月上旬から発病し、2月下旬から3月上旬にピークとなり、平均の発病月日は2月27日。混合群は1月下旬から発病し、2月中下旬にピークで、平均の発病月日は2月21日でした(図参照)。これらを見ると、辛温群と辛涼群との平均の発病月日は15日の差があり、辛温群は寒い時期に発病していることがわかります。また、混合群は両者の間となつていきます」(三浦先生)

3つのタイプの症状は

同じ花粉症といっても、このように違いがあるにもかかわらず、これまでこれらを一緒にして、小青竜湯などの治療を行っていたのです。

花粉症で悩む人にとって、自分はこの群に入るのか、この点がいちばん気になる点です。その前に、なぜこれまで体を温める小青竜湯などの、辛温群に適した漢方薬だけが使われてきたのか、その点を考えてみましょう。ポイントには鼻水です。花粉症のほとんどの人は鼻水で悩みます。しかも透明な鼻水です。三浦先生の研究では、辛温群の場合、92・2%で、辛涼群の場合、71・4%で、混合群の場合、87・6%で透明な鼻水が見られました。全体では84・6%です。

